

「保育者の資質と発達」に対する保育系学生の意識

齋藤政子・諏訪きぬ・岡本富郎
中坪史典・東田幸子

I. 問題と目的

2001年の児童福祉法改正によって保育士資格の法定化が図られ、ようやく保育士も法的根拠を持つ資格となった。幼稚園が戦後まもなく学校教育法第1条の学校として位置づけられ¹⁾、幼稚園教諭が教育職員免許法で規定されているのに対し、かなり後れた感はあるが、公教育の担い手としての保育者に対する社会的地位は、不十分な部分はあるものの漸次向上してきていると見ていいだろう。

保育者に求められる職務内容も、近年の少子化傾向を受け変化してきている。前述の児童福祉法では、保育士の職務内容は、子どもに対する「保育」と並んで、保護者に対する「保育に関する指導」が明確に位置づけられた。また、幼稚園でも、公私立あわせて、預かり保育実施園は、2004（平成16）年6月現在で9419園、全体の67.9%、私立幼稚園では全体の85.3%（7091園）に及んでおり、一日4時間を標準とする教育時間以外で、幼児の生活全体に対する配慮や、心身の発達を促すような保育環境の整備が職務として必要となってきた。また、保育所・幼稚園に対しては、保護者への子育て支援や地域に開かれた園づくりなどへの期待はますます高まっており、2005年4月に総合施設モデル事業が始まっていることも相俟って、保育所・幼稚園の保育者の資質や力量の発展・向上が今日ますます求められているのである。

ところが一方で、地域に根ざして園運営をおこなってきた保育所の民間委託などが進み、さしたる保育経験のない保育者が職員のほとんどを占める園がでてきている。いったい保育者の保育はマニュアルで間に合うものか、保育経験のない保育者に本当に質のよい保育ができるのか、この問いに答えるためには保育者の発達と保育の質との関連について検討することが喫緊の課題であろう。

ところで、保育者の資質や専門性について、わが国ではどのように捉えられてきたのだろうか。「保育学の最後の言葉は保育者である」²⁾というように、保育者の養成や発達に関する問題は、古くて新しい問題である。保育者の資質・専門性に関しては、日本保育学会をはじめ、全国保育士養成協議会や全国保育士会など多くの場で研究・討議がされてきた。口を極めていわれてきたのが「保育者は単なる技術者であってはならない」ということである。乳幼児を理解し、保育をデザインする者としての専門性と同時に、人間性に裏付けられた知性と感性を持つ存在でなければ、保育者は、子どもの生命力を育てることはできない。そして、このような資質や専門性は、養成段階だけでなく保育者として実践しつつ学ぶ中で育てられるものなのである。

近年の保育学会における保育者の資質と専門性に関する研究の動向について、関口（2001）が、「実態把握（心身の状態、労働状態）、保育者としての態度、保育意識などの

スタティックな側面に代って、成長し、変化する保育者の側面に焦点を当てた研究が増加しつつある。」と述べている通り、「保育者の成長・発達」をキーワードとした報告が目立ってきている。高濱（2001）は、保育者33人の語りから自分が保育者として変化したと認識する側面を拾い出し、保育者が経験年数によって関心を向ける問題が異なることを示している。これによると、保育者として成長するにつれて「問題に対し見通しをもてるようになった」と答えた者が最も多く、「幼児の見方が多面的になった」「幼児の意図を考慮できるようになった」という回答が目立つことが報告されている。水内ら（2001）は、「ちょっと気になる子」は、クラスが安定して一人ひとりの子どもに保育者の関心が移るときに気になりだすが、保育者がその子どもの発達の偏りに配慮した一対一のかかわりを増やす中で、その子の変化がみられ、担任保育者の気づきの観点や受け止め方が変わっていったこと、「気になる子」の存在も保育者の成長によって変わることを事例研究で明らかにしている。成田（2004）は、保育士の描く保育士像や保育者の発達について調査報告を行っている。これによると、子どもの成長とともに親と子と保育士の関係は変化するが、経験年数が増えるにつれて「親子に寄りそう保育士像」を描く者が多くなること、経験年数の多い保育者は、担当した子どもとのかかわりを通して学んだことが大きいと感じていることなどを報告している。また、秋田（2001）は、バンダーベン（VanderVen：1988）の保育者の段階モデルを紹介しながら保育者のキャリア発達のあり方について考察している。

ところが、このように保育者観については、毎年数多く報告されている一方で、資質・専門性が経験年数に比例してどのように身についていくと考えるか、あるいは身についたかなど、特に保育系学生を対象とした保育者の発達の道筋についての研究は、ほとんど着手されていないのが現状である。

したがって、本研究では、本学において保育士および幼稚園教諭をめざす学生を対象に、保育者の資質と発達についての意識調査をおこない、保育者としての発達の見通しを保育系学生がどのように考えるかについて考察したい。また、保育士養成課程を設置して3年目を迎えた本学において、保育系学生が「保育者のもつべき資質とキャリア形成」についてどのようにとらえているかについて、その意識状況を把握し、今後の養成教育に役立てたいと考える。

Ⅱ. 研究の経過

著者らが所属する「明星大学保育者のキャリアに関する研究会」は、2004年度学内特別研究費助成を受けて活動を開始した研究会である。2005年度からは「保育者・教師のキャリアに関する研究会」としてメンバーを増やし研究活動を継続している。以下にこれまでの研究の経過を示す。

1. 「保育者のキャリア形成に関する調査」の実施

調査対象：東京都、千葉県市原市、神奈川県横浜市、静岡県静岡市、大阪府大阪市、大阪府高槻市の公私立保育園・幼稚園の保育者・園長・主任

手続き：保育者のキャリア発達と形成すべき資質・力量についてどのように捉えているかに関する質問紙法による調査を実施し、計322人から回答を得た。

結果の整理：「保育者として必要な資質・力量」の項目のみカテゴリ化して整理した。資質・力量は、①子ども好きで子どもの気持ちに寄り添う、②子ども一人ひとりを受け止める、などの子どもに向かう力量、③協調性、コミュニケーション力、④社会人としての常識、⑤若い保育者への援助、⑥保護者への援助、保護者からの信頼など、子どもを取り巻くおとなへ向かう力量、⑦豊かな感性・柔軟性、⑧責任感、⑨前向きで意欲がある、などの人間性に関するもの、⑩基本的な保育技術、⑪的確な判断力、⑫身体能力、⑬音楽的専門力量など、専門技術に関するもの、⑭研究心や向上心、⑮文章表現能力、⑯人権を尊重する態度など、専門職としての力量に関するものがあげられた。それらのうち、似かよった表現を整理し、保育者として必要な資質・力量に関する調査用項目を作成した。

なお、他の質問項目については現在分析中である。

2. 「保育者としての軌跡とその発達」について聞き取り調査を実施

調査対象：東京都私立保育園A園長、東京都公立幼稚園B園長公立保育所C保育長、神奈川県私立幼稚園D園長、静岡県私立保育園E主任

手続き：保育者を志した動機や社会状況、これまでの苦労ややりがい、保育者として生きてきたことはどういう意味があったのかなどライフヒストリーについて聞き取り調査をおこなった。著者らが直接お話を伺うのと同時にテープレコーダーで記録し、文字媒体に変換する。(現在分析・検討中)

Ⅲ. 方法

2004度におこなった「保育者のキャリア形成に関する調査」からカテゴリ化した「保育者に求められる資質・力量」および「保育者のキャリア形成」についての項目を基に、保育系学生への質問項目を作成し、調査を実施した。

調査対象：

- ・本学人文学部心理・教育学科1年 保育者論受講生 64名
- ・本学人文学部心理・教育学科2年 保育士養成課程 保育実習受講生 40名
- ・本学人文学部心理・教育学科3年 保育士養成課程 保育実習受講生 25名
- ・本学人文学部心理・教育学科4年 初等教育実習（幼稚園）受講生38名

(受講生の人数は当日授業に出席して質問票を受け取った学生の数である。)

これらの受講生のうち、1年生は、保育系の専門科目は3科目履修しているのみで実習には行っていない。2年生は、実習事前教育を4月からはじめ、夏期に施設実習をおこなう予定。3年生は、施設実習、保育所実習を終え、対象者の半分は介護等体験もおこなっている。4年生は、7割が幼稚園実習を経験し、介護等体験もおこなっているが、保育士養成課程ではない。

調査時期：2005年7月中旬の授業時間内

結果の整理：本論では、質問項目1「保育者に必要だと思われる資質・力量として自分は

何を優先させるか」と質問項目2「1年目、5年目、10年目、20年目の保育者は、どのような資質・力量を積み重ねていくか」の2項目に対する回答を中心に分析した。

質問項目1 保育者に必要だと思われる資質・力量として自分は何を優先させるか（上位五項目）

- ① 社会人としての常識をわかまえている
- ② 人権を尊重し、謙虚な態度である
- ③ 協調性があり、コミュニケーション能力がある
- ④ 責任感がある
- ⑤ 高い保育技術を有している
- ⑥ 健康管理ができ、勤務状況が良好である
- ⑦ 感性が豊かである
- ⑧ 明朗・快活で労を惜しまない
- ⑨ 子ども好きで、子どもの気持ちに寄り添うことができる
- ⑩ 表情がやさしく、子どもから好かれる
- ⑪ 子ども一人ひとりを受け止めることができる
- ⑫ 向上心があり、自己研修に努めている
- ⑬ 的確な判断ができ、対応能力がある
- ⑭ 創意工夫して環境構成をすることができる
- ⑮ 保育に対する研究心がある

質問項目2 保育者は、保育者として発達する過程で、どのような力量を身につけていくのが望ましいと考えるか。園に入って1年目、5年目、10年目、20年目と保育者歴を重ねる中で、どんな力量を身につけたいか。（各4項目抽出）

- ① 子ども一人ひとりを受けとめ、気持ちを理解することができる
- ② 子どもの発達段階を理解し、子どもにあった保育を展開できる
- ③ 子どもが楽しめる遊びを提示し、豊かな活動を提供することができる
- ④ 子どもの目線にあわせてことばかけをし、子どもの意図を読みとることができる
- ⑤ 豊かな感性と人間性にあふれている
- ⑥ 基本的な保育技術を身につけている
- ⑦ しっかりした保育観にたって、意見を述べることができる
- ⑧ 保育者同士のコミュニケーションをはかって保育を展開できる
- ⑨ 若い保育者の相談を受けるなど、援助や指導ができる
- ⑩ 保護者の相談相手となるなど保護者が安心して子育てができるよう援助することができる
- ⑪ 生活活動の行動モデルとして振る舞い、子どもの生活指導ができる
- ⑫ 日常の保育実践を振り返り、省察しながら、保育を展開することができる
- ⑬ 保育の中で生ずる問題に対し、見とおしをもって対処することができる

なお、本調査の一部は全国保育士養成協議会第44回研究大会にて報告されているが、本研究はそれらを基に再度分析を行なったものである。^{註3}

Ⅳ. 結果と考察

1. 保育者としての資質・力量の理解

「保育者に求められる資質・力量」15項目のうち、保育系学生が選択した上位5項目を

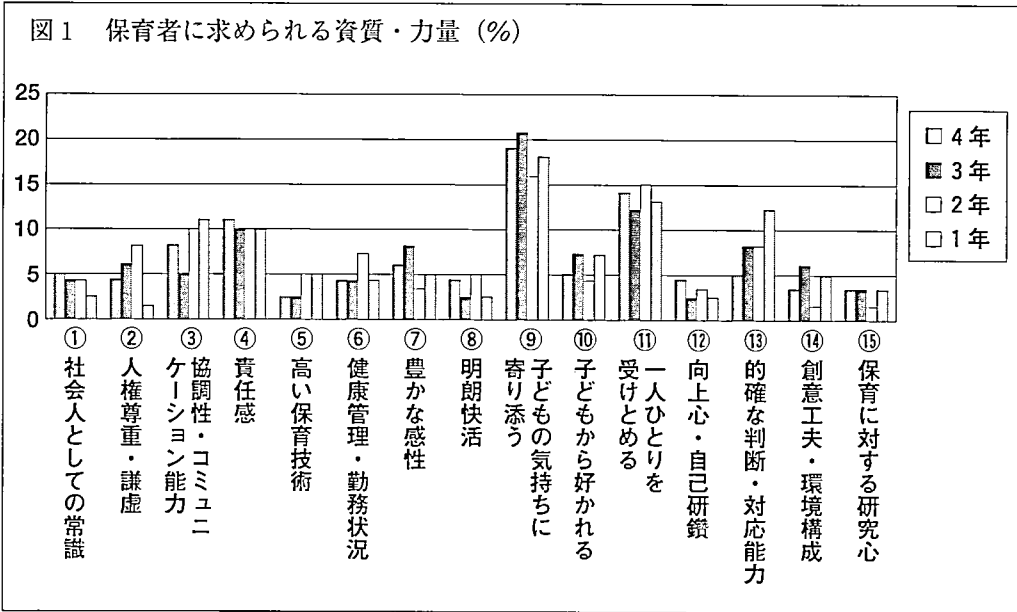


表1 明星大学保育系学生が「1年目の保育者に求められる資質」として選択した項目

選択順	1年	2年	3年	4年
一位	⑨子どもの気持ちに寄り添う	⑨子どもの気持ちに寄り添う	⑨子どもの気持ちに寄り添う	⑨子どもの気持ちに寄り添う
二位	⑪一人ひとりを受けとめる	⑪一人ひとりを受けとめる	⑪一人ひとりを受けとめる	⑪一人ひとりを受けとめる
三位	⑬的確な判断・対応能力	⑬的確な判断・対応能力	④責任感	④責任感
四位	③協調性・コミュニケーション能力	④責任感	⑦豊かな感性	③協調性・コミュニケーション能力
五位	④責任感	②人権尊重・謙虚	⑬的確な判断・対応能力	⑦豊かな感性
		⑬的確な判断・対応能力	⑩子どもから好かれる	

集計したところ、図1のようになった。最も多く選択したものから順に並べ上位のもののみまとめた表1をみても、「子どもが好きで、子どもの気持ちに寄り添うことができる」「子ども一人ひとりを受けとめることができる」が、対保育者、対保護者の項目より、すべての学年で共通して多かった。このことは、保育者の中心的職務が保育であること、その中でも、子どもに対する理解と受容が保育者の資質として重要であることを、保育系学生が理解しているということを意味していると考えられる。また、「協調性があり、コミュニケーション能力がある」という項目は、1、2、4年では1割前後の学生が選んでいるが、最も実習回数の多い3年生では5%にとどまっていた。十数年前に中田ら(1987)が保育系学生を対象に調査した報告によると、保育者として必要なことの第一位は、「健康であること」第二、三位は「子どもを理解すること」「子ども好きであること」第四位が「熱意があること」となっており、保育者や保育職に対する意識の変化がみられる。

2. 保育者としての発達の見通し

保育者が経験年数に応じてどのように資質・力量を身につけていくかの見通しに関しては、全学年で、ほぼ同様の結果が得られた(表2, 3, 4, 5)。つまり、経験年数の浅いうちは、子どもに対する保育力量を獲得することが中心課題であるが、経験年数があがるにつれて、保育者同士のコミュニケーションをはかる、若い保育者の相談にのる、あるいは保護者の相談相手となるなど、援助者やコーディネーターとしての役割をイメージする資質・力量が選択されていた。また10年目以降には保育実践を省察しながら展開する

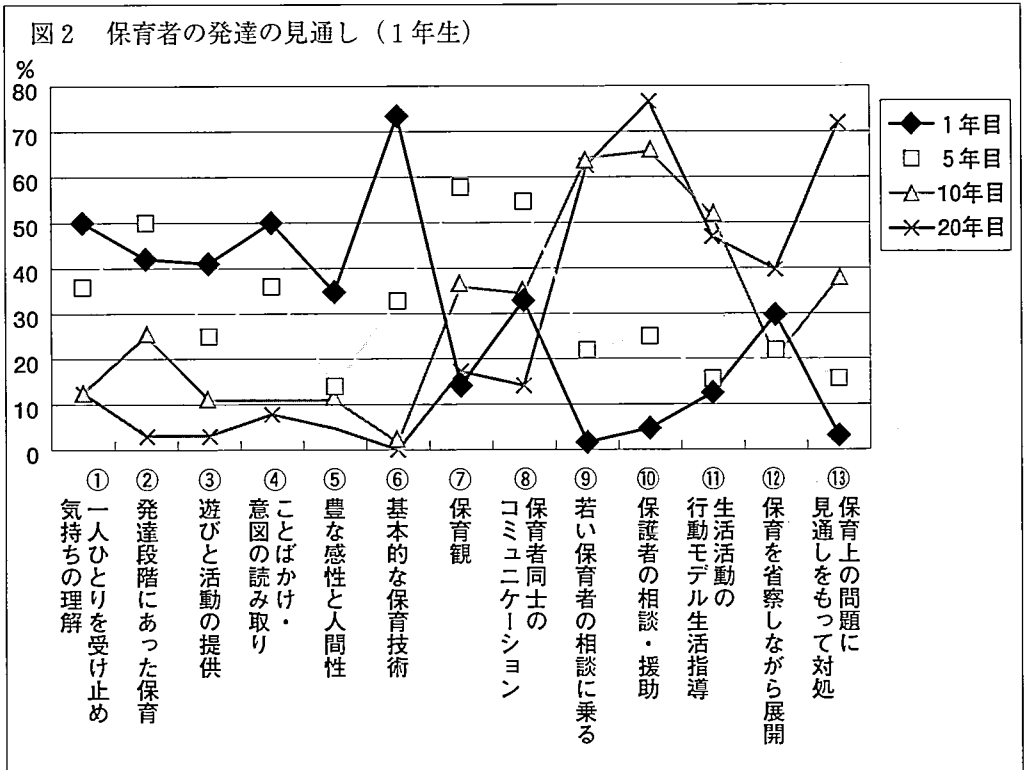


図3 保育者の発達の見通し（2年生）

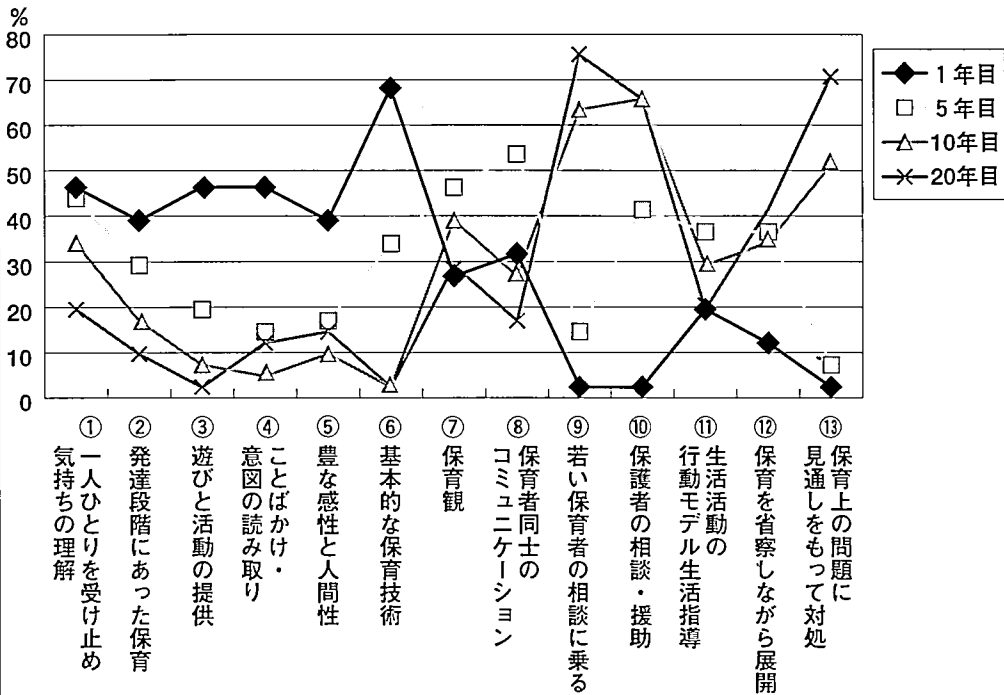
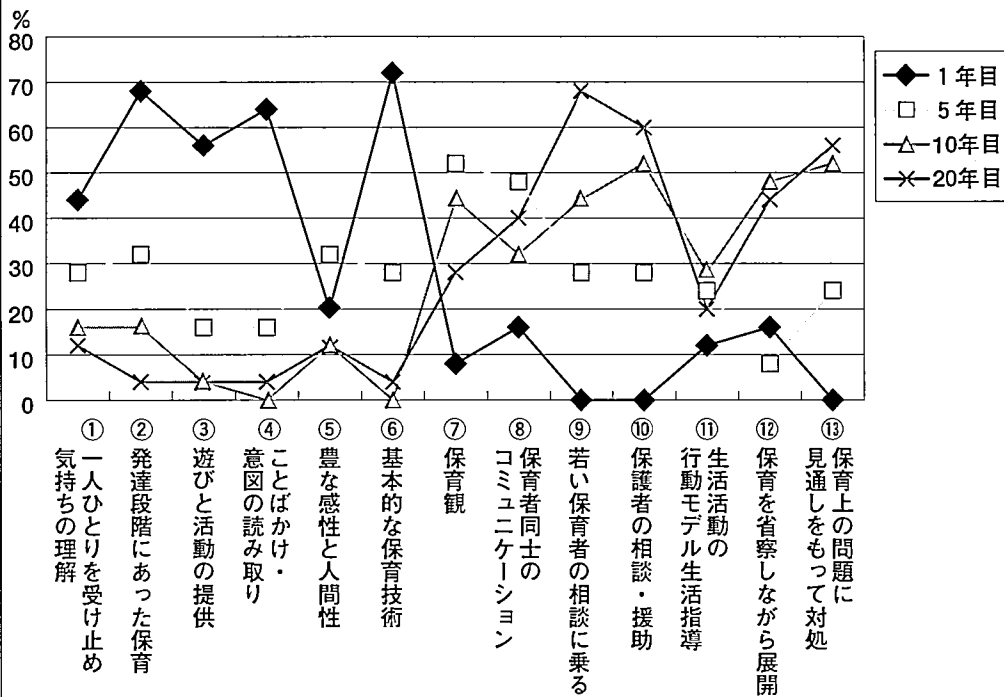
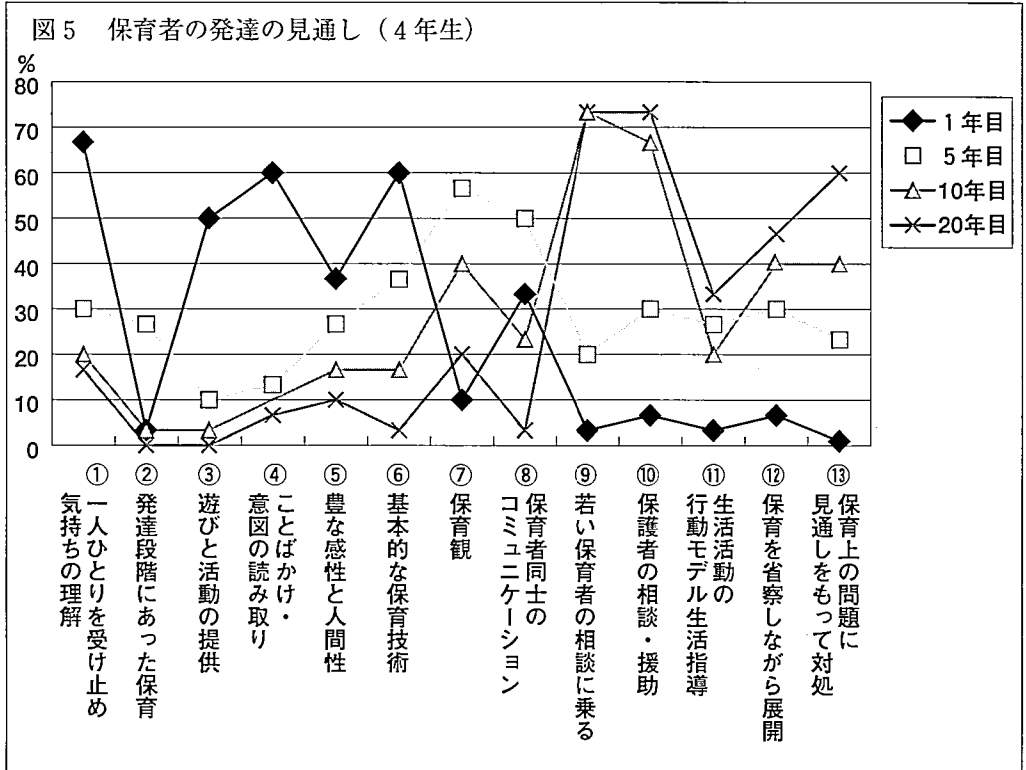


図4 保育者の発達の見通し（3年生）





力量や、問題解決能力も獲得課題として考えていることがわかった。

学年による比較では、特に大きく選択がわかれていたのが、1年目の保育者の項目であった。3年生は「発達段階にあった保育」を68%の学生が選択しているのに対し、4年生は3.3%が選択するのみであった。これは、4年生は保育士養成課程ではなく、幼稚園実習の事前指導の受講生であること、3年生が乳幼児の発達等を学びすでに保育所実習を経験していることなどが影響していると考えられる。

その点について確かめるため、調査結果を図示したものを3年生と4年生に提示しこのような結果となった理由を推測して記入するよう説明したところ、特に、1年目の保育者の資質に関する意見の相違について表2のように回答した（12月の授業時間内に実施、4年回答者37人、3年回答者11人）。やはり圧倒的に多くの3年生は保育所実習での経験が大きいと回答しているが、4年生では、「1年目では発達段階にあった保育は難しいのではないか」「個々の子どもとのふれあいなど、発達段階の理解よりもっと大事なものがあると思ったから」などの理由を記入する学生もあった。3年生の回答が実習と学習経験に集約され4年生の回答が散らばっているのは、回答した時点で3回の保育実習経験のある3年生と幼稚園の実習経験しかもたない4年生との経験量の差が出たのではないかと考えられる。また、幼稚園での実習で、発達段階の理解が保育をするうえで必要ないということはありませんが、乳児期前半、後半、幼児期前半、後半とめまぐるしく変化する子どもの姿を発達的に理解しながら発達の最近接領域に働きかけていくことが必要な保育所と違い、幼児期後半にすでに入っている子どもたちが多く存在する幼稚園では、実習期間内で発達の理解と指

表2 1年目の保育者の資質として「発達段階にあった保育」を選択した学生が3年と4年とで割合が大きく違うのはなぜだと思いますか

	4年生 (%)	3年生 (%)
発達段階にあった保育は1年目には難しいと考えたから	11	0
発達段階を理解するための授業が3年は多く、4年生はほとんどなかったから	17	18
3年生は保育所実習を経験しているのに対し4年生は幼稚園実習のみだから	19	73
4年生は個々の子どもにあった保育が必要だと考えているから	8	0
4年生は基本的な保育技術などの資質のほうが必要だと考えているから	8	0
4年生は発達段階よりも年齢にあった保育を実習でおこなったから	3	0
4年生は子どもとの触れ合いなどもっと必要なことがあると考えたから	8	0
4年生は大学の勉強の中で子どもの発達段階については理解しているから	3	0
35人学級では発達に差があり幼稚園では現実的に無理だと考えたから	3	0
わからない	6	9
無回答	14	0

導の方法について学ぶ機会は少なかったのではないかと考えられる。

以上の結果から、以下のことがわかった。

- ① 明星大学の保育系学生は保育者に求められる資質・力量として「子どもの気持ちに寄り添う」「一人ひとりを受け止める」という対子どもの項目を全学年共通して選択していた。
- ② 「若い保育者の相談にのる」「保護者への相談・援助」は、全学年とも10年目、20年目の資質として選択していた。
- ③ 保育者の発達の見通しについては、1年目、5年目、10年目として選択した資質に違いがみられたが、10年目、20年目の資質として選択した項目はどの学年もほぼ同様のグラフが描かれていた。
- ④ 1年目の保育者に必要な資質として「発達段階にあった保育」を選択した3年生が68%であったのに対し、1年生は42%、2年生は39%であり、4年生は33%にとどまっていた。その理由を3年生、および4年生は、保育所という乳児から幼児までの発達差が大きい子どもを対象とした実習経験の有無や、発達に関する学習量の違いによると推測していた。
- ⑤ 保育系学生の保育職に対する意識は、実習の事前指導やその年度に学んだ授業内容によって左右されること。実習の経験が保育者観や施設・園に対する印象に大きく影響する ということがわかった。

ところで、学生の自由記述から、「学べば学ぶほど保育職の重要さを痛感した」「ただ子どもが好きだけではつとまらない責任ある仕事」「保育者として知らなければならないことがたくさんあることがわかった。」など保育職の責任の重さを自覚する意見が多く寄せられた。と同時に「こんなに大変な仕事なのに給料が安すぎる」「男性保育者として将来が不安」という声もあり、保育職の現実と展望について保育者養成校としてどう語っていくべきか考えさせられる調査となった。

V. まとめ

明星大学の保育系学生を対象とした保育者の資質・力量と発達の見通しに関する調査では、多くの学生が、保育という営みの本質を、子どもとどのようにかかわるかという本質的な部分で理解していることがわかった。一方、保育者の職務のひとつとして位置づけられている保護者への援助・助言については、5年目までの保育者に必要な資質としてはほとんど選択されておらず、所謂ベテランの保育者に必要な資質と考えていることがわかった。即戦力と実践応用力の両方を兼ね備えた保育者を養成するためには、子どもを真ん中にした保護者との共育のあり方など、保護者との連携についても教育課題としていかなければならないだろう。また、実習経験の影響は大きく、保育者の専門的教育は、専門教科の中での学習と実習事前教育および実習と事後指導の二つを機軸に連携をとって行わなければならないことがあらためて明らかになった。

明星大学の保育士養成課程は開設して3年目が過ぎようとしている。この間、一期生、二期生、三期生対して専門教育、実習事前教育、保育所実習、施設実習などを通して保育者となるための専門的能力が身につくように努めてきた。保育者養成の大きなシェアを占める短期大学と比べ、4年制大学では保育技術や音楽的保育力量の養成が軽んじられているのではないかという現場からの批判も受けつつ、学内の教職員と連携をとり、本校ならではの教育・養成システムを整備・改善してきたつもりである。4年制大学での保育者養成が、各教員の専門分野に埋没するのではなく常に現場を視野に入れ現場と連携しながら、

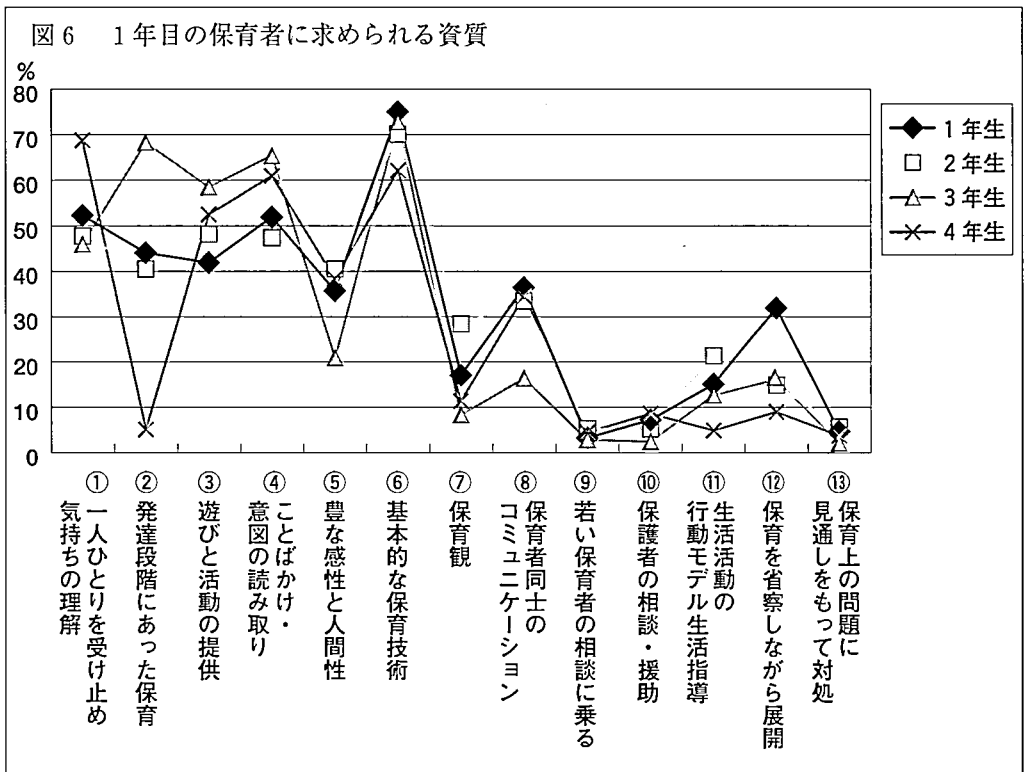


図7 5年目の保育者に求められる資質

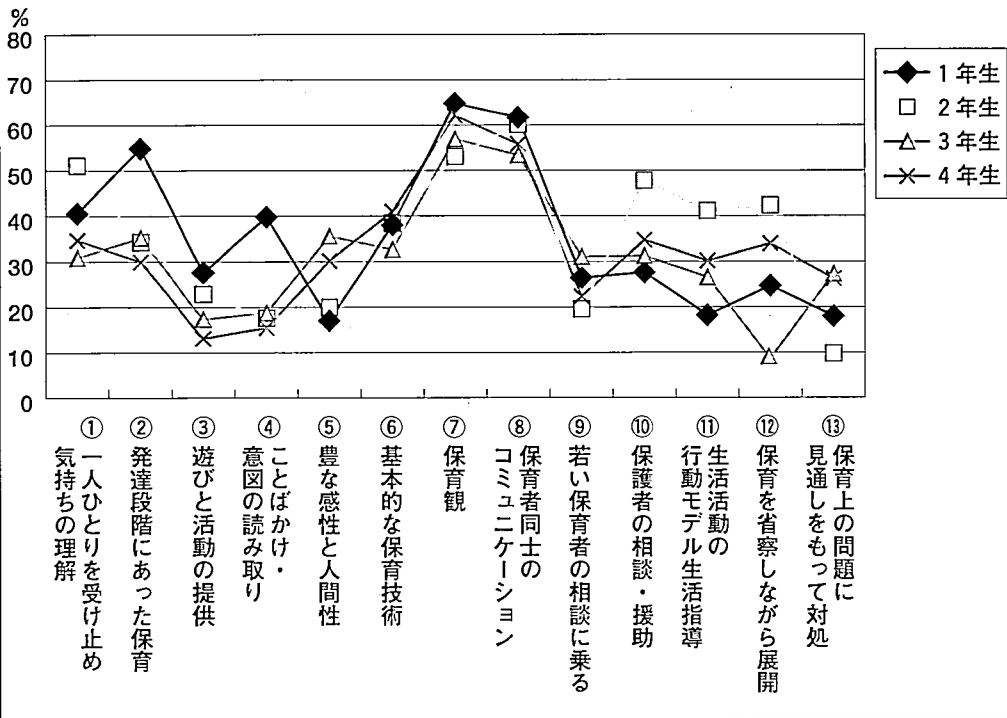
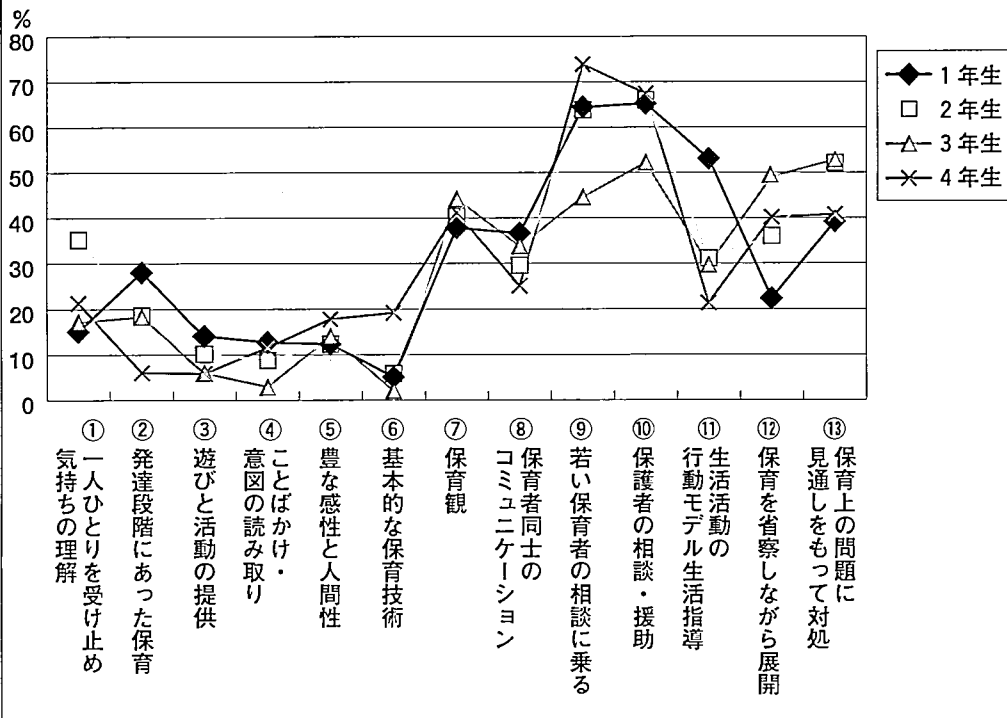
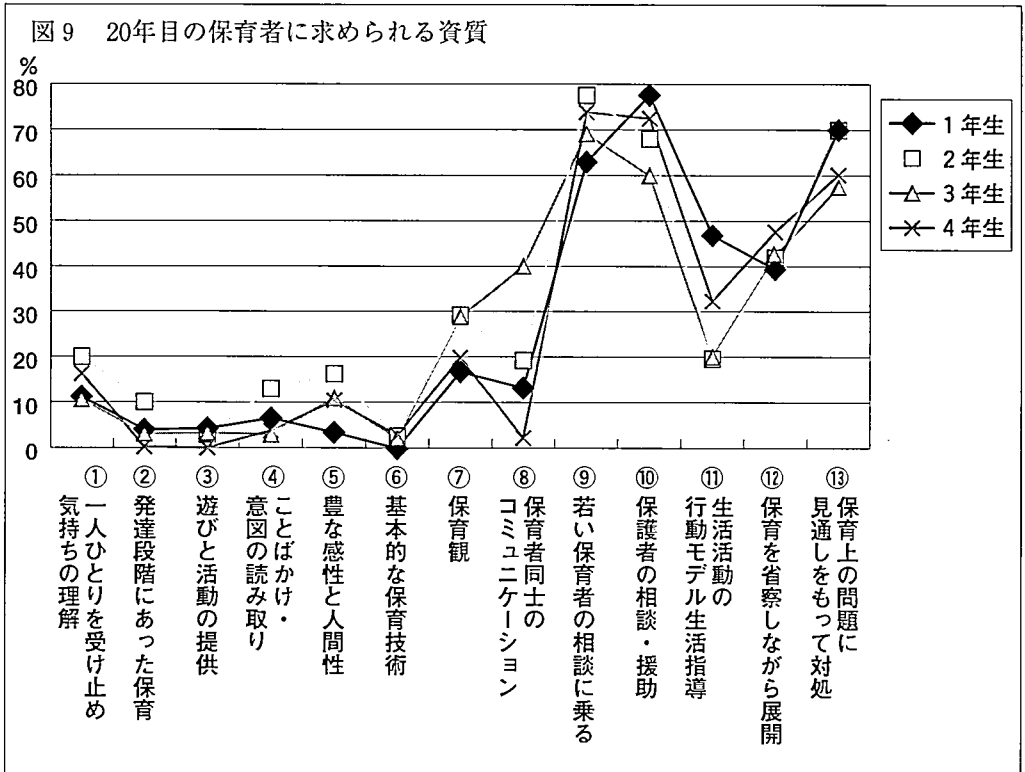


図8 10年目の保育者に求められる資質





自らの教育実践に対する評価を行い、保育者養成の専門文化をつくっていくことが求められている。

註

- 1947年に制定された学校教育法第1条において、幼稚園が学校として規定されたため、それまで呼ばれていた「幼稚園保母」という名称が、「幼稚園教諭」となり、男子にも道が開かれた。(保育所保母になる道が男子にも開かれたのは1977年である。)幼稚園の目的については、同法第77条に明記されている。また、幼稚園教諭免許状については、教育職員免許法に、免許の定義、授与の条件、失効などが明示されている。
- 1987年当時日本保育学会会長であった荘司雅子は、日本保育学会保育学年報の序でこのように述べている。『保育者養成』保育学年報1987年版
- 全国保育士養成協議会での発表は以下の通りである。
齋藤政子・諏訪きぬ・岡本富郎・中坪史典・東田幸子(2005)『『保育者の資質とキャリア形成』に対する保育系学生の意識』全国保育士養成協議会第44回研究大会 分科会(学生理解と支援2)

引用文献

- 秋田喜代美著「保育者とアイデンティティ」 森上史朗・岸井慶子監修『保育者論の探究』ミネルヴァ書房 2001
- 水谷豊和・増田貴人・七木田敦著「〈ちょっと気になる子ども〉の事例にみる保育者の変容過程」『保育学研究—特集 保育者の専門性と保育者養成』第39巻第1号 日本保育学会 pp.28-35 2001
- 中田カヨ子・阿部明子・永井千恵子・光岡攝子・大井晴策著「保育所に対する学生の意識の変化」『保育学研究—特集 保育者養成』保育学年報1987年版,日本保育学会 pp.48-57 1987
- 成田朋子著「保育士の描く保育士像と保育者の発達」研究紀要 26号 名古屋柳城短期大学 2004
- 関口はつ江著「保育者の専門性と保育者養成」『保育学研究—特集 保育者の専門性と保育者養成』第39巻第1号 日本保育学会 pp.8-11 2001
- 高濱裕子著『保育者としての成長プロセス』風間書房 2001
- Vander Ven, k, 1988 Pathways to professional affectiveness for early childhood educators. In B. Spodek, O. N. Saracho & D. Peters (Eds.), Professionalism and early childhood practitioner, Teachers College Press.